

動く美術館としての 山鉾の新たな楽しみ方とは？

3班メンバー

上田 未来 (京都中央信用金庫) 大上 若奈 (京都大学文学部 1 回生) 近藤 紗季 (京都造形芸術大学情報デザイン学科 1 回生)
田中 博 (日本ウエスト 株式会社) 堀 健 (日本ウエスト 株式会社) 三上 恒親 (日本ウエスト 株式会社) 山口 真広 (京都大学農学部 4 回生)

テーマの背景・目的

私たち3班は、祇園祭の山鉾に興味をもちました。祇園祭の山鉾は、その全体に豪華絢爛な装飾品が付けられているため、「動く美術館」と呼ばれています。町衆によりつくられ、市内を巡行する機動性を持ちながらも、それ自体に芸術的価値が高いということがわかりました。そこで、3班では、山鉾の装飾品の美しさをより深く、京都内外の人々に知ってもらうため、山鉾の装飾品に焦点を当てた祇園祭の楽しみ方を提案するというテーマに決定しました。また、長い年月の間装飾品を維持してきた山鉾から、持続可能な社会として世界が発展していくヒントを得られるのではないかと考えました。

調査①

函谷鉾保存会訪問

6月11日、函谷鉾保存会の桜井会長よりお話をいただきました。また、山鉾の部材が保管されている倉庫を見学しました。装飾品の中で代表的なのは「イサクに水を供するリベカ」というタペストリーです。復元新調には開始から7年（織る作業1年）もの年月がかかります。会所と倉庫の奥行きは約50メートルもあり、1階と2階に一つ一つ名称が書かれた木の箱に入れて保存されていました。鉾を運営する上での費用は年間約3500万円にもなるそうです。装飾品以外にもさまざまな取り組みについてお話しいただきました。函谷鉾は、お稚児さんや女性などの改革を行ってきました。現在は、LINE スタンプを作成・販売など、若者にむけた試みをされています。課題としては、会所の運営・管理を行う伝承委員が企業の方に限られること、異常気象対策、新しいマンションなどが立つことによる住民の意識の差などが挙げられました。

調査②

山鉾の装飾品見学

前祭、後祭ともに、山鉾立て後の装飾品が実際に取り付けられている状態を見学しました。また、山鉾の会所で装飾品の展示が行われている所がある場合には、合わせて見学し、説明を聞いたりしました。鉾のミニチュア模型が置かれていたり、ただ見るだけでなく茅の輪くぐりができる山（山伏山）があったりと、展示方法も鉾によりさまざまでした。装飾品のモチーフは、海外に由来するものも多く、装飾品の中にも中国や西アジア、ヨーロッパなど、世界各国から集められたものがあることもわかりました。



考察・提言

調査から、祇園祭の山鉾について、装飾の再現や、一つ一つ部品ごとに保存したりする方法は長期間継承されてきたことがわかりました。しかし、月鉾では巨大な真木の強度を上げるため、骨組みとなる素材にシリコンを使用したりするなど、本来の美しさを備えつつ、山鉾は改良されてきたこともわかりました。また、山鉾を美しく保つために不可欠な保存会の運営についても、神事的な部分は変わらないけれど、現在に至るにつれ、企業など様々な団体からの協力を取り込み存続させてきたということを知りました。

このことから、1150年の間祇園祭が続いてきた理由として、「山鉾町同士の競争意識」「神事としての位置づけ」「山鉾の美術品としての魅力」があったことが挙げられると考えました。これは、SDGsの4.7番、9.2番、11.4番に結びついているといえます。

そして、祇園祭をこれからも持続させていくためには、私たちは「全体」と「個」の取組が必要ではないかと考えました。全体としては、山鉾の御利益を紹介したり、祇園祭の鉾全体としてスタンプラリーを行い、普段回らない山鉾も訪れたいような取組を提言します。また、祇園祭を目的に訪れる人に向けたゲストハウスを設立することも有効だと考えます。これは宵山や巡行以外の祇園祭期間にも人々に訪れてもらうことを促す狙いがあります。そこで山鉾の装飾品や歴史について知ったり、それを宿泊者内で共有できるようなものを想定しています。「個」としての取組は、各鉾のホームページを工夫するなど、今よりもっと多くの山鉾が、それ自身に特有の御利益や歴史を発信していくことを提言します。ただ美術的な美しさを「見る」だけでなく、その背景を「知る」ことが、祇園祭の魅力をより知る方法だと考えます。これらの取組から、祇園祭へのさらなる支援が見込めるだけでなく、京都の学生や企業が参加することで、京都全体の活性化につながると思います。



調査を終えて

祇園祭とSDGsを考える中で、ベストプラクティスや協働の取り組みが生まれてくれば良いと思うし、それを見つけたいです。

(上田未来)

山鉾の鑑賞について、その場で山の情報を得てから見るとまた違った感じ方ができると思いました。

(近藤紗季)

祇園祭は想像よりはるかに多くの人々がかかわりあってこそ成り立っている祭りだと感じました。それが、祭が1000年以上も続いてきた理由だと思いました。

(大上若奈)

祇園祭が発祥して1150年あまりが経って、なお上品な輝きがあるのは伝統を受け継いだ方々の頑固ながらも柔軟な発想に隠されている気がします。

(田中博)

「風流」という人をあっと驚かせ楽しませるといった概念から、山や鉾を大きく作ったり、海外の珍しい美術品で装飾を施したりして人々を更に驚かせようとした町衆の「粋」が600年以上も続いているのは非常に興味深かったです。

(堀健)

異国の芸術から日本に古来から伝わる価値観を見いだすことができるというのは、SDGsの17番に通ずる普遍的な価値観やその先にあるものを示しているのではないかと思います。

(山口真広)